

PROGRAM

ヴェイヴス

バー・ノルガルド

野づちの歌

高橋悠治

グラウンド I

福士則夫

サッファ

ヤニス・クセナキス

インタビュアー 内山 修一

四季のコンサート

1984年12月4日(火) PM 6:30

浜松市民会館

主催 浜松音楽友の会

昭和43年 東京藝術大学打楽器科入學。
作曲家、エム・美音。昭和学園高等学級音楽科4年間
在籍。大学作曲科修了後入社。昭和47年 東京藝術大学打
楽器科助手、有資格認定演奏者。昭和48年 東京藝術大学
打楽器科講師。昭和49年 東京藝術大学大学院入學。
昭和52年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和53年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和54年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和55年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。

昭和55年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和56年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和57年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和58年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。
昭和59年 『アーバン国際音楽祭』にて打楽器部門
審査員(審査員:12楽器)として評議賞を受賞。

高橋 悠治 (たかはし ゆうじ)

吉原すみれ (よしはら すみれ)

バイオノロジー



吉原すみれパーカッションリサイタル

共演 高橋 悠治

ウェイブス

バー・ノルガルト

デンマークの作曲家ノルガルトのこの作品は1969年、同じデンマークの打楽器奏者で指揮官のリロフの委嘱によって作曲され、この人に献呈されている。1人の打楽器奏者（使用する楽器は4コング、大タム=タム、クロマティック、ゴング、マリンバ、シンバル、トム=トム、2ティンバニ）のための「ウェイブス（波）」は連続する打楽器のアタック音が、前後や同時的なリズム的関係の中できまざまなパターンとそのデリケートな変化を聴きてにもたらすことをねらったものである。また、この作品の出版楽譜（ヴィルヘルム・ハンセン社）には、この作品を演奏するための基礎的な練習課題が多数加えられており、リズムによるデリケートな表現のための教育的作品という意図も持っているようだ。

波のリズムは4つのゴングにはじまり、4つのクロマティック・ゴング、4つのマリンバの鍵盤を経過して、シンバルとドラムの混った響きで終るリズムで、曲は2つのティンバニの上に落されたゴム・ボールの自然の法則に従った自由な振動によって終る。

グラウンド I

福士則夫

雲母（きらら）か、或は桂石（けいせき）の粒子を想わせる音質感。しなやかな胡蝶の運動にも似た吉原すみれの世界は目眩むほどに色彩的である。蒲団中に作品依頼があった当時—おそらく74年頃のことと思うが—暗間に息をころして毎日をやり過ごしていたバリ生活に突如謎を巻き通りすぎていった花嵐は、私にとって魅惑的な素材のひとつとなつた。

帰国後の75年秋、話が具体化してきたこともあっていく度か彼女のスタジオに足を運んだおり立ち出されてくる楽器とも思えぬ（道具）など—それは本来、楽器ではなく他の目的のために実際使われているものたち—が次つぎと並べられ試された。バネ・鉄管・オモチャ・装身具・貝殻・ガラス・ペアリングの玉、朝鮮の仏具屋にあったという木製の鉢などなど……。その鮮かな記憶のいくつかは切り抜かれ保管された。一方、すでに市民権を獲得している打楽器たちはほとんどの場合、解体され再吟味された。そうした手づきを経て得られた音響空間は私の内耳鼓をたえずおしひろげ膨みつづけていった。

音が形を求める形が音を識別していくことは自明のことではあるが、そうした作業がふと消えて、しなうマレットの向う側に存在する精霊たちの木霊（こだま）が私の内的なグラウンドに還ってきたというてびたえを覚えたとき、すべての手順の大半は完了していた。30kgの荷物とともにヨーロッパを今も巡り歩いているというグラウンド Iは、もはや私ではなく、吉原すみれの言語に近いであろう。（福士則夫）

曲はある定数と、増殖或は蚕食される不定数を骨子とし、木質・金属・皮・金属・木質の五部分からなる。

（使用楽器） 5アンティックシンバル、1オモチャの鉄琴、5カウベル、3リン、1プラスチャイム、1グラスチャイム、3吊りシンバル、1チューブラベル（F管のみ）、1ゴング、1タムタム、4ウッドブロック、3テンブルブロック、1木鉗、1ギロ、1鳴子、1マリンバ、1マラカス、1オモチャ、1ハーモニカ、1牛声、1タンブリン、2ポンゴ、5トム

野づちの歌

高橋悠治

1983年に開かれた。

ふだん着のコンサート“高橋悠治と仲間たち、”の時に高橋悠治自身と吉原すみれのために書かれた作品、即興性が重視され、バラフォン、アンクロングなど、民族楽器が多用される。本年11月“カラワン楽団歓迎コンサート”で再演された。

サッファ

ヤニス・クセナキス

クセナキスは、1922年ギリシャ人の両親のもと、ルーマニアで生まれた。

ギリシャ・パリで、メシアンなどに師事し、また建築家としても、ル・コルビュジエと共に活躍してきた。クセナキスは、コンピューターを導入するなど、科学的な面と芸術との相関関係を問題にするなど、世界の作曲家でも、最も重要な意味をもつ作曲家の一人として現在も活躍中である。

この作品は、イギリス・バッハ祭の委嘱作品として作曲され、1976年に初演された。

この作品は、同じギリシャ人の女流詩人に捧げたもので、楽譜からみると、即興的な要素は全くなく、リズム主体のものであり、あらゆる面からみてもリズミックな作品である。